

22 室町幕府の対外政策

(1) 日朝貿易

蒙古襲来後→元寇以後 **私貿易** 継続（九州、瀬戸内の土豪）

① 明の外交政策

ア **海禁政策**…中国人の海外渡航・自由な民間貿易を禁止

北方民族や **倭寇の活動を抑える**…とともに、中国内の反対勢力が倭寇など外国勢力と結ぶことを防ぐため、採用された。

イ 国交を **朝貢形式** に限定＝朝貢貿易以外の貿易禁止

明は、漢民族中心の伝統的な国際秩序の再興をめざし、明に朝貢する国とだけ国交をもった。明との貿易には明の皇帝から「国王」の称号を得ることが不可欠だった。

② 勘合貿易

ア 形式… **朝貢形式**（朝貢するという形）→一元的な貿易

イ 統制… **明の皇帝から交付された勘合の所持義務** →入港地を **寧波** に限定

ウ 展開過程

将軍	中国	朝鮮
	前期倭寇 宍岐、対馬、松浦を拠点に朝鮮・中国沿岸 耕地少なく交易しかない 倭寇の好物⇒生糸、真綿、水銀、鉄鍋、米、人を略奪 倭寇取締要請（明使）義満受諾（幕府財源補える、南朝方につく海賊北朝に）	
3代 義満	①1368 明 の建国 モンゴル民族打倒 ▶ 朱元璋 が元を滅ぼす 初代皇帝： 光武帝	①1392 朝鮮 建国 ▶ 李成桂 が 高麗 滅ぼす 倭寇討伐で名声あげる
3代 義満	②1401 国交樹立 1401年、遣明使 肥富と祖阿 を明に派遣した。→ 日本国王 に冊封される ③1404 勘合貿易 の開始 貿易は朝貢形式、港は 寧波 輸出： 銅 ・硫黄・刀剣・金 輸入： 明銭 （ 永楽通宝 ）、 生糸 幕府の権威なく貨幣発行不可	①貿易の開始 (1)対馬の⇒ 宗氏 が統制 (2)三浦の⇒ 倭館 で交易 (富山浦、乃而浦、塩浦)に入港 輸出： 銅 、銀、硫黄、南海の産物 輸入： 木綿 ・大蔵経 衣料革命： 麻から木綿へ
4代 義持	④1408 足利義満没 ⑤1411 勘合貿易の 中断 ▶朝貢は屈辱的 1432 まで	⑥1419* 応永の外寇 (1)朝鮮が対馬を襲撃 →倭寇の根拠地 →貿易の中断

・尊氏は **後醍醐天皇の冥福を祈るため** に **天竜寺** を建立した。造営資金が足りな

いため、1341年、元に貿易船の派遣を許可し、船に乗ってゆく博多商人たちから損益に関わらず銭 5000 文を納めさせた。幕府は納税と引替に海賊からの安全を保証した。幕府が後ろについていれば、海賊行為がおこなえない。この貿易船を **天竜寺船** と呼ぶ。

・同様のことは鎌倉幕府が建長寺造営の時にもおこなっており、1325年、元に **建長寺船** を出す。

史料研究

「日本准三后道義、書を大明皇帝陛下にたてまつる」

金千両、馬、刀などを土産に持って行く。「准三后」⇒太皇太后、皇太后、皇后に次ぐ位のこと。翌年、明から使節が来て「**日本国王** 源道義」と記す文書を渡した。明は義満を「日本国王」と認めたことになる。これを **冊封** という。また、中国の大統暦を示して正朔にしろと言ってくる。中国の暦を使うことは、時間を支配する中国皇帝の配下に入ったことを示す。これで日本は明の属国となった。

∴貿易の利益独占＝幕府の財源（臣下の礼 cf）「日本国王 **臣源**」

義満は喜んで臣下の礼をとり、中国風に漢字一字の姓を名乗った。足利氏は源氏の出なので、「源」としたもの。

将軍	中国	朝鮮
6代 義教	②1432 勘合貿易の 再開 ▶貿易の利益に注目～1547 ③貿易の実権→幕府は離れる (応仁の乱) 大内氏 ⇒ 博多商人 と結ぶ 細川氏 ⇒ 堺商人 と結ぶ 1523* 寧波 の乱 主導権を巡り対立、乱後は、大内氏独占、大内氏 滅亡 1551 で 断絶	①貿易再開 (7代義勝のころ) ④1510* 三浦の乱 … (1)日本人居留民の反乱 (2)日朝貿易は縮小 →日本との貿易は接待費など出費多し、貿易厳禁に反乱。

(2) 日朝貿易

①朝鮮の成立 1392…李成桂

②対等な外交←明中心の国際秩序を前提

③貿易の展開

ア 各地の武士・商人らが多数参加→多元的な貿易

イ 統制…○朝鮮交付の**圖書**という印章を捺した文書の持参

…○ **対馬の宗氏** が発給する文引という渡航証明書の所持

○入港地を **三浦**（富山浦、乃而浦、塩浦）に限定

朝鮮政府が倭寇対策として多様な日本側通交者を受け入れたため、**各地の武士・商人らが多数参加する多元的な貿易** が展開したが、応永の外寇以降、このような統制策により **対馬の宗氏を媒介とした管理体制** が整った。

(3)琉球の動向

①中山（首里城）・北山（今帰仁城）・南山（勝連城）（14世紀・各地の**按司**が連合）→明に朝貢

②琉球王国の成立…中山王**尚巴志**が琉球統一 1429

ア 首府…首里城^{グスク}

イ **中継貿易**の展開→日本-中国-南海間の貿易、坊津・博多へ入港

琉球が日本経由で朝鮮にもたらしたもの→唐辛子、ここからキムチ始まる。

ムラがクニになって互いに抗争がおこなわれる。10世紀には**按司**という氏族長が村落共同体を支配する。日本では弥生時代にあたり、そのための**グスク**（城）ができる。現在は500箇所確認され、世界遺産となっている。全部が城ではなく、聖地も含まれる。文字の歴史記録がないため、詳しいことはわからない。「**おもろそうし**」という歌謡による伝承があるだけである。

ある程度統合が進み三山の王朝にまとめられ、北山は今帰仁、中山は首里、南山は勝連城に拠って抗争した。それぞれが明に朝貢し、冊封を受けることで政権を維持していた。

(4)アイヌ社会の成長

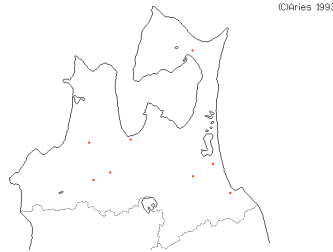
①12～13世紀頃、アイヌ文化の形成

②和人（本州系日本人）の北海道（蝦夷ヶ島）への進出

ア 津軽**十三湊**を拠点

十三湊は、鎌倉時代以来、アイヌ社会（蝦夷集団）との通交を管轄した**安藤**氏が拠点をかまえ、北海道交易や日本海海運の発達とともに繁栄した。そして安藤氏配下の和人が渡島半島へ進出し、館をかまえるようになった（室町時代は道南十二館と総称された）。

イ **コシャマインの乱** 1457…アイヌの大首長コシャマインが蜂起→**蠣崎氏** 制圧



論述研究 日宋貿易と日明貿易の性格の相違 一橋大 2002

論点 日明勘合貿易と日朝貿易とはどのような点で異なるか

日明勘合貿易は、明の海禁政策のもと、朝貢形式で行われ、政府間の貿易に一元化されていた。日朝貿易は、将軍による対等な通交が行われただけでなく、各地の武士・商人らも多数参加した。

論点1 中世前期とどのように異なるか

中世前期、周辺諸国との公的な通交はないものの、民間商船による貿易・文化交流がさかんであったのに対し、中世後期は、国家間の公的な関係をもとに貿易・文化交流が統制され、民間商船による自由な通交は抑制された。

論点3 16世紀にはどのように変化したか

日明間では、日本国王の遣使が形骸化し、大内氏滅亡によって勘合貿易が途絶する一方、

倭寇が活発化して海禁政策が動揺した。日朝間では、貿易が縮小する一方で対馬の宗氏による独占が進んだ。